

これは、クモのアナンシが、どれだけ巧みで、賢かったかを物語るお話です。これらは本当のお話です。これらはまた、クモのアナンシが時に、どれだけ怠け者で、うそつきであったかについて語っています。あいにく、これらも本当のお話です。エグヤ・アナンシは、熟練した農民でした。土地を綺麗にして農場にするため、丸一年かけて、妻と息子と共に働きました。彼らは以前、一緒になって小さな土地を耕していたことがありました。しかし、これは今まで扱った中で、一番大きな土地です。

彼らは畑に、ヤムイモやトウモロコシや豆を植えました。収穫物はものすごいものでした。今まで育てた中で一番でした。アナンシはトウモロコシや豆を見て喜びました。ヤムイモも掘り出せば、ちょうどいい頃だと思いました。突然、アナンシの喜びは欲に変わったのです。このような富を、妻や息子を含めて、誰とも分け合いたくなくなったのです。

彼は作物が実り、収穫出来るようになると、妻と息子を呼んで、言いました。「みんなで一生懸命畑を整備し、作物を育てたよな。これから刈入れをして、納屋に仕舞っておこう。それが終わったら、みんな少し休んだ方がいい。お前と息子は村の家に戻って、数週間休みなさい。私は仕事で、とても遠くまで行かなければならない。私が家に戻ったら、みんなで農場へ来て、ごちそうにしよう」

アナンシの妻と息子はこれをいい案だと思い、まっすぐ村まで帰って行きました。これがアナンシの、騒動の元となりました。彼は農場の近くに快適な小屋を建てて、収穫したごちそうを、自分一人で食べ始めました。日中の暑い時に彼は眠り、夜になると食べ物を集めるため出てきて、準備しました。誰も分け与える人はいませんでした。

まもなく、アナンシの息子は、父親は仕事で旅に出ているというのに、自分は休んでばかりで、罪悪感を感じるようになりました。彼は農場へ戻ってきて、通りの雑草を抜き取り、次の季節に向けて、畑を整備しました。働いていると、納屋のそばを通り、収穫したものすごい量の食べ物が消えていることに気がきました。彼は、泥棒が収穫物を盗んだのだと思いました。

アナンシの息子は村へ戻ると、何が起こったのか人々に話しました。彼らは棒で人型を作ると、人に見えるよう、それをわらで包みました。それから彼らは、わらをねばねばしたタールで覆って、農場まで運んで行くのを手伝い、夜になるのを待ちました。何人かの男は、見張りをして、泥棒を捕まえるのを手伝うため、アナンシの息子と残りました。

エグヤ・アナンシは何が起きたか気付いておらず、納屋からもっと食べ物を取ってこようと、隠れ場所から出てきました。納屋に行く途中、畑の中に、男が立っているのが見えました。アナンシはすぐに人影まで駆け寄ると言いました。「この畑は俺の家族のものだぞ。ここから出て行け」人影は動かず、喋らないので、アナンシは右手で人影を殴りました。

アナンシの手は、人影にしっかりとくっつきました。「よくも俺の手を掴んだな。もう一度殴ってやる」アナンシは左手で人影を殴ると、またもタールにくっついてしまいました。アナンシは手を放そうとして、人影の真ん中を、足で押そうとしました。足もくっついてしま

いました。それからもう片方の足で蹴りました。すぐにアナンシは地面から浮いてしまいました。彼は空中で浮くようにして、畑の中にあるタール人形へくっついてしまったのです。そしてそのまま、夜明けまでいました。

アナンシの息子と村人たちは、隠れ場所から出てきて、畑の中の人形のところまで、走ってきました。泥棒をこらしめようと、枝やこん棒を持って出てきたのです。泥棒が実はアナンシだと分かると、とても驚きました。欲張りな父を恥じたアナンシの息子をのぞいて、村人たちは一斉に笑いました。

アナンシは、自分が身勝手に欲張りだったことをとても恥ずかしく思い、クモに変身して、隠れるため、逃げてしまいました。彼はある場所からまた別の場所へと移っていきました。誰かがアナンシを見つけると、みんなアナンシのことをあざけ笑いました。アナンシがついに暗い、天井の埃っぽい角に隠れて見つからなくなるまで、こういうことが時折ありました。そういう場所で、今日までアナンシを見つけることができます。